アカバナユウゲショウ（赤花夕化粧）は種子を水に流すの？

　写真のように、小さな花を咲かせる、「ピンクの花」の名札が付いた植物を頂いた。くださった女性は、可憐な花を愛好するようである。この花は、この辺で「マサツチ」といわれる砂質の土壌に合っていて、どんどん増殖した。
（名前が長い間分からなかったが、ブログで問うたところ、埼玉の女性が教えてくれた。移入植物のようで雑草化している）

　一日で終わる花のあとには、熱気球のような形をした緑色の実ができた（下の写真）。やがて褐色になり、もう種が熟していると思ったので、実を指で押し潰すと、長さ１ミリほどの種が出てきた。このまま放っておけば、ホウセンカのように、種を「弾き飛ばす」と想像したので、何日も待ってみたが、いっこうにその気配がない。

　ところが、雨の日、茶色い四弁の「花」が、いっせいに咲いているのを見た（下の写真）。よく見ると、熟した実が雨で全開し、中の種が雨水に流れていた。（コンクリートの壁に、点々と種が付いているのが写っている。写真の下部左寄り）種を「水に流す」とはイキな戦略である。

　前項で取り上げた「帝王貝細工」という花は、ドライフラワーになっても、雨が降ると「花」を閉じ、晴になると開く。この過程で、綿毛のついた種は、風に乗って飛んでいく。「花弁」は傘の役割をしている。

　しかし、「ピンクの花」が行う、「水に流す」戦略は、それとまるで違う。雨に濡れて、「タネのケース」が開く仕組みは、私にとってとても悩ましい。

　ちなみに、「ケース」の開閉は何回でも可能である。晴天の日に、私の手で水を掛けてみた。速い場合には、70秒で全開。遅い場合でも、約３分で開放作業が完了する。しかし、種が流れ出た、初回のオープニングが、同じ速度であったかどうかは分からない。